

医学部・歯学部附属病院で『緊急被ばく医療講座』を開催



附属病院玄関前での搬送実習



放射能汚染患者の除染実習

2月3日（土）、医学部・歯学部附属病院で緊急被ばく医療講座を開催しました。

当日は、本院の医師・看護師・放射線技師20名に加え、長崎県内の医療関係者、消防・搬送関係者、自治体関係者さらに海上保安庁や海上自衛隊関係者など合計47名の参加がありました。

本院は、原爆被災を受けた前身である長崎医科大学病院の時代から、被爆者の治療にあたってきた歴史があり、今後も原発事故などの緊急時に、2次・3次医療機関として、患者の搬送及び受け入れを円滑に行うため開催されたもので、今回が4回目となる。従来は、救急部における放射能汚染患者の除染訓練が中心であったが、昨年より搬送実習も並行して行うようにしました。

開催に当たり同病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター長の山下俊一教授より、2年間の世界保健機構（WHO）の経験に基づく世界の緊急被ばく医療体制に関する話があり、また国の緊急被爆医療対策の強化施策の一環として、文部科学省「緊急被ばく医療関係者実務研修事業」を受託し、全国各地で主催している原子力安全研究協会の衣笠達也先生より本事業の説明がありました。

その後午前中は救急や搬送の第一線で活躍している関係者に、放射線事故の歴史と放射線の基礎知識及び測定技術の実習があり、午後は除染方法や搬送方法を、模擬患者や実際の救急車を用いての研修がありました。参加した長崎北消防署の救急救命士は、「汚染を防ぐための知識や技術を身につけ、万が一の対応に備えたい」と抱負を述べられました。

本学で培われてきた被ばく医療に関する学問や医療が、長崎県域のみならず我国の緊急被ばく医療の発展に繋がっていくことが期待されます。

（医学部・歯学部附属病院）